

名和昆虫研究所側面史

保科 英人¹⁾

I. 民間昆虫学研究所を立ち上げた男. 名和靖

明治 29 年 4 月, 岐阜市京町に設立された名和昆虫研究所. “昆虫翁”と称した岐阜県出身の名和靖 (1857-1926) という一人の強烈な個性によって設立された私立研究所である. その後, 研究所は明治 37 年 4 月に岐阜公園に移転, 同 44 年 3 月に財団法人となった. 名和昆虫研究所の付属施設として大正 8 年に開館した名和昆虫博物館は, 現在も堂々と同地に立ち, 人々に対する昆虫学普及の拠点となっている.

『白水隆アルバム』(白水隆文庫刊行会編, 2007)には「名和靖. 明治 15 年岐阜県農学校卒. 明治 19 年から同 20 年に東大理学部で学んだ後師範学校教諭となるが, 明治 29 年に退職して名和昆虫研究所を設立」と略歴が記されている. 名和はギフチョウの発見者として有名であるが, 彼の功績は基礎的昆虫研究にとどまらず, 数多の農業害虫やシロアリに代表される家屋害虫の防除試験や, 標本作成技術指導, 害獣防除技術指導, 博覧会への昆虫標本の出展など多岐に渡った.

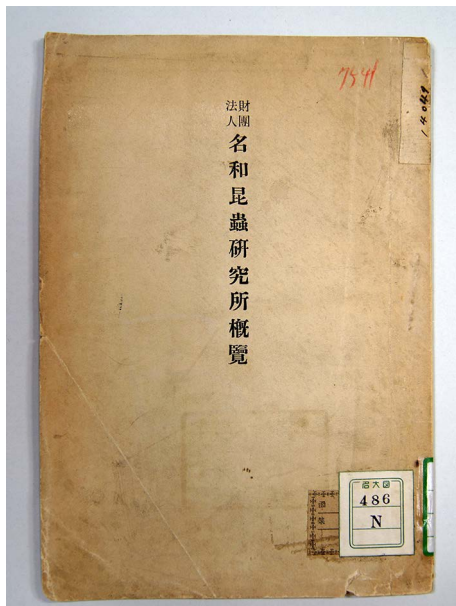


写真1 『財団法人名和昆虫研究所概覧』(名古屋大学図書館所蔵). 実物の表紙裏には「東京帝國大學農科大學 名和研究所 寄贈」との記載がある. どのような経緯で所蔵が東大から名大に移ったのかは不明.

名和靖は研究者としての才もさることながら, 教育者, 農学技術指導者としての適性にも恵まれていた. ある時, 岐阜長良川で子供たちが遊んでいた. そのうち数人の子供が昆虫を弄び始めたが, 別の一人の子供が「それは益虫だから虐めるな. 名和先生が益虫だと言っていた」と叫ぶと, 子供らは昆虫虐めを止めたとの逸話がある(土井, 1937). たかが子供相手と言えども, 名和は熱心に昆虫学普及に努めていたことが窺える.

名和靖には平野 (1943) と木村 (1944) の 2 編の代表的伝記がある. また, 名和本人も最晩年病床にありながら回顧談を残した(名和, 1924). 名和靖自身の経歴を記す文献は上記伝記の他, 白水隆文庫刊行会編 (2007) や長谷川 (1967) などいくつかある.

しかし, 名和昆虫研究所の通史となると手頃な史料が見当たらない. 筆者が現在の名和昆虫博物館に問い合わせたところ, 詳細な研究所史は作成されていないとの回答を得た. 恐らくは大正 4 年 (1915 年) に編纂された『財団法人名和昆虫研究所概覧』(写真 1) がほぼ唯一の通史であろうが, 何分 20 ページの小冊子である上に, 全国の大学図書館では名古屋大学しか所蔵していない (CiNii による検索結果). 国立国会図書館にすら保管されていないらしいから, 文字通り稀有本である(注 1).

現在の名和昆虫博物館によれば, 名和靖が残した書簡類は相当数あり, その整理が一時期試みられたものの現在は作業が中断している. 将来的には名和の関係文書類が公開され, 研究所史の全貌が明らかになることを期待したい.

昨年筆者は上記の希少史料である『財団法人名和昆虫研究所概覧』を閲覧する機会を得た. 残念ながら現段階では研究所の全史を明らかにできたとは言えない. 本稿では昆虫学者名和靖個人の業績ではなく, 名和昆虫研究所の方を対象とし, 特に経営に苦しんだ研究所の側面に焦点を当てて研究所史の一端を述べることにしたい.

II. 名和昆虫研究所の事業

『財団法人名和昆虫研究所概覧』(以後『概覧』と省略)には名和昆虫研究所の事業内容として, 以下の項目が列

¹⁾ Hideto HOSHINA 福井大学教育学部

記されている。

- (1) 昆虫の採集及び飼育
- (2) 図書の出版
- (3) 講習及び講話
- (4) 昆虫標本の保存及び展示

『概覧』を読む限りでは(1)の対象となる昆虫は害虫ないしは益虫に限定されていない。「昆虫の習性及繁殖の状態等を、實地飼育に依り研究することは、純正昆虫學上極めて重要」と基礎研究が目的である旨が記されている。(2)の研究所編纂による図書については、『昆虫標本製作全書』(明治36年)など基礎昆虫学分野に含まれるものもあるが、多くは『貝殻蟲圖説』(明治34年)『害蟲防除要覧』(明治38年)など、応用昆虫学の範疇に入る。(3)の講習及び講話とは、名和所長ないしは所員を各地に派遣して、農業害虫防除等の指導にあたったこと等を指す。大正期には研究所所員だけでなく、農商務省から派遣された昆虫学者も指導講師を務めるようになった(瀬戸口, 2009)。(4)の昆虫標本の管理について、『概覧』には「害蟲其の他の昆虫標本を示すの要ある」とあり、害虫を中心とした昆虫標本収集とも読めるが、害虫と合わせて写生や装飾用の昆虫標本も陳列していた。そして、研究所は各地より来所する団体や学校生徒に対し随時丁寧な説明付きで標本を縦覧せしめたと言う。以上纏めると、名和昆虫研究所は博物館と農業試験場害虫部門の両方の機能を併せ持っていたことがわかる。

もちろん、研究所の設立目的が「特に國家經濟に最も影響を及ぼす害虫を防除するを以て一大目的」(『概覧』)である以上、事業内容が害虫防除を中心とした実用的分野に偏っていることは確かだ。しかし、名和靖は決して基礎的昆虫学研究を軽視していたわけではない。

上記4項目の事業には含まれていないが、名和昆虫研究所の科学的貢献の一つが雑誌『昆虫世界』の編集及び出版である。『昆虫世界』は発刊直後から中央の動物学界から「文章の平易なる假名を附したる等又大に讀者に便なる可く、圖版の鮮明夥多なる他雑誌の及はざる所」の「好雑誌」との評を得ていた(『動物學雜誌』第9巻100号)。

では、『昆虫世界』とは如何なる雑誌であったか。明治36年第7巻を例にとると「果樹の綿蟲驅防の一策」(桑名伊之吉)と言った害虫防除の學術論文の掲載は当然として、「グンバイトンバウを記す」(佐々木忠次郎)などの基礎昆虫学に関する報文の他、「明治三十六年の昆虫學界」との我が国の昆虫学界の動向記事、さてまた非実用的な「美術的蠅叩」の図が掲載されるなど文化昆虫学の分野まで扱っていることがわかる。また、明

治40年1月発刊の第11巻113号には神奈川県農事試験場の西川豊次郎作の「害蟲唱歌」が楽譜付きで掲載されるぐらいだから、虫関係なら何でもありの雑誌である。言わば『昆虫世界』は当時の日本の昆虫総合雑誌と呼ぶべき存在だった。

また、研究所は非営農一般国民に対する昆虫学普及にも一役を担った。例えば、名和靖は明治36年開催の第五回内国勸業博覧会附属水族館(堺市大浜公園)の会場の第二十九号水槽用に水生昆虫の生体を寄贈した(同年6月23日付東京朝日新聞)。当時、生きた昆虫を搬送することは殆ど例がなく、それ故に名和もかなりの苦心を要求された。種々工夫した結果、ブリキの空缶にミズゴケとワラを詰め、その中に虫を放って小包として送った。この方法で展示された生体昆虫はゲンゴロウやコガタノゲンゴロウ、コオイムシ、ミズカマキリ、マツモムシ、ギンヤンマ(ヤゴ)などで、その数は数百頭にも及んだ(『昆虫世界』第7巻67号)。5月初旬には水族館でヤゴの羽化が始まったと言う(同年5月2日付大阪毎日新聞)。

第五回内国勸業博覧会の本会場は大阪市であって、堺市に置かれた水族館は別会場との扱いであった。ただ、同年3月1日開会の博覧会自体が百万人を優に超える入場者数を集めた以上(國, 2005)、多くの人々が名和の手による水生昆虫類を目にしたことは間違いない。実際、博覧会開催2か月後の4月末時点で、40万人を超える観客が水族館に押し寄せていた(同年5月1日付大阪毎日新聞)。

以上、名和昆虫研究所の貢献は害虫防除や益虫利用と言った農業昆虫学分野に収まらなかった。日本の近代昆虫学全体に対する研究所の功績は頗る大きかったと言わねばならぬ。

III. 研究所経営に苦慮する名和昆虫翁

本章①で述べるように名和昆虫研究所は岐阜県の他、岐阜市や岐阜県農事試験場といった行政機関から財政補助を受けていた。公金が投じられている以上、研究所から何らかの報告書や書類が県庁等へ提出されていたはずである。しかし、岐阜県歴史資料館のwebsiteの明治期行政文書目録で「名和靖」「名和昆虫研究所」等のそれらしい文言で検索しても、今のところ明治・大正期の行政保管の研究所関連資料を見いだせていない(注2)。従って、現時点で筆者は名和昆虫研究所の財務状況を記す一次史料に目を通していない。本稿を執筆するにあたり財務関係の数字については『概覧』に記載された僅かな数字のみ引用した。

平野(1943)と木村(1944)の名和靖の代表的伝記2編は個人伝記と言う性質故か、名和の昆虫学者としての活躍ぶりは記されているが、名和昆虫研究所がどう運営

されていたかの記述が乏しい。幸い、名和昆虫研究所の動向、例えば害虫防除の講習会開催や著名人の来所事実については、『昆虫世界』掲載の雑報を通じて一部知ることが出来る。ただ、CiNii による検索結果では『昆虫世界』を所蔵する国内の大学図書館は 55 館と決して少なくないが、殆どの大学図書館が多くの巻号を欠いている。国立国会図書館ですら『昆虫世界』はコンプリートに揃っていない。筆者による『昆虫世界』掲載の研究所動向記事調査も現時点で完全終了しているわけではないことをご了承願う。

①財団法人となる以前の名和昆虫研究所への補助金の規模

昆虫の研究でいくら優れた業績を上げようとも、大金を稼げるわけでもない。行政から何らかの援助がなければ昆虫研究所の運営が非常に困難であることは素人が考えても解る。大正 4 年発行の『概覧』は、明治 43 年以前の名和昆虫研究所が受けた補助金を以下のように列記する。

1. 岐阜県は所長に害虫駆除調査員を嘱託。その年間手当として明治 29 年から 30 年は 360 円、同 31 年から 43 年までは毎年 480 円を支給。
2. 同じく岐阜県は上記所長への手当とは別に研究所員の出張調査費として、明治 29 年から同 37 年頃まで 1,000 円から 2,000 円を補助。
3. 明治 37 年 4 月、岐阜県農会や岐阜市内有志からの建物や寄付金等の援助によって、研究所は岐阜公園へ移転。
4. 明治 40 年、大阪朝日新聞社の寄付金募集事業により特別標本室が完成。
5. 明治 43 年、名和昆虫研究所が開催した記念昆虫展覧会の開催経費は、岐阜県、岐阜市、岐阜県農会よりそれぞれ数百円ずつの補助により賄う。
6. 明治 43 年、岐阜県農事試験場は所長に害虫調査業務を嘱託。年間手当として 700 円を支給。

福岡県英彦山に所在し、英彦山神社宮司の高千穂宣麿男爵が設立した私立の九州昆虫学研究所は地元の田川郡から明治 35 年に 100 円、同 36 年には 150 円の補助を受けていた（高千穂, 1946）。また、明治末、東京帝室博物館の嘱託だった高千穂宣麿の月給は 20 円だった（保科, 2015b）。これらの数字と比較すると、名和昆虫研究所が岐阜県等から受けた手当や補助金は十二分のようにも思える。しかし、活動範囲がほぼ福岡県に限定されていた九州昆虫学研究所と、学術雑誌を発行し各地に所員を派遣して害虫防除指導にあたっていた名和昆虫研究所とは事業規模は比較にならない。

一方の支出の方であるが、『概覧』は明治 29 年から

同 43 年までの 15 年間で研究所の活動全体にかかった経費は 69,300 円と記す。総額を単純に年数で割れば、年間約 4,500 円必要だったとの計算になる。帝国議会においても「研究所の年間支出は 4,5 千円」との発言があるので（本章④参照）、約 4,500 円との数字は妥当ではないかと思う。明治 43 年の 6 を除くと、上記 1～5 のうち恒常的な補助金は 1 と 2 の人件費だけと思われる。よって、仮に年支給額が 1,500 円の場合、研究所の必要運転資金の 1 / 3 にすぎず、最大限 2,500 円受け取れたと考えても半分強である。結局、研究所の運営は名和靖個人の私財に負うところも大きく、彼の個人資産からの持ち出しは計 10,200 円にも及んだと言う。

さて、明治後半期の 1,000 円だの 10,000 円だのが現在の物価感覚で如何ほどのものか、との疑問が当然のことながら湧いてくる。しかしながら、筆者が福井県内の歴史系学芸員に尋ねたところ、「江戸時代の〇両（ないしは明治時代の〇円）は現在のいくりに相当しますか？」との市民からの問い合わせは非常に多いが、最も答えたくない問いの一つであると言う。例えば、明治と平成のコメ 10 kg の値段の比較は容易だが、コメの価値自体が当時と今で同じではない。専門家による安易な数字の提示は無責任となるのだ。一般には大卒国家公務員の初任給や大工の日当の比較で江戸・明治・大正期の金額を現在の貨幣価値に換算することが多いが、これとて万能ではないらしい。

とは言え、大凡でよいから名和昆虫研究所が要した経費を平成の貨幣基準で表現したくなるのが人情と言うもの。幸い筆者は史学界に何の責任も持たない虫屋なのでかなり荒っぽい方法で計算してみた。明治期の東京朝日新聞（現在の朝日新聞）の復刻版を調べると、明治 29 年から明治 43 年まで同紙 1 部の価格は 1 銭から 2 銭であることがわかった。ここで仮に同時期の東京朝日新聞 1 部を 1 銭 5 厘（= 1.5 銭）とし、これが現在の 120 円に相当するとしてみた。明治 39 年のそば 1 杯（かけ？）は 3 銭 5 厘程度だったそうなので（森永編, 2008）、上記の新聞価格を比例倍すると、明治末頃のそば 1 杯は現在の日本円で 280 円との計算になる。この“そば”を現在の立ち食いのかけ、と考えればそう頓珍漢な換算値ではあるまい。

この換算方法（当時の 1 円=現在の 8,000 円）を当てはめると、明治後半期に岐阜県から嘱託として得ていた名和靖の年収は 300 万～400 万円。名和昆虫研究所の年間経費は約 3,600 万円で、行政からの人件費補助は上記の名和の年俸を含め約 1,200 万円～2,000 万円と言う計算になる（注 3）。民間の一機関に対して投じられる公金が年間 1,200 万円と聞くと一見少なからぬ額のようにも思える。しかしながら、県庁からの補助だけでは研究所運営に支障をきたすことは数字の上から

明々白々である。

②害虫駆除講習から得られた受講料収入は如何ほどか？

国からの援助がなかった名和昆虫研究所の経営は当初より困難だったとされている（日本科学史学会編，1965）。研究所発行の『昆虫世界』に「寄付金頼む」との記事が載ったことも少なくない。もっとも，研究所経営は「カネが無くて二進も三進もいかない」と言うほどでもなかったらしい。岐阜県からの補助を受けていた名和昆虫研究所は，言わば半官半民の研究機関だったからである（瀬戸口，2009）。とは言え，県からの補助金が支出に追い付いていなかったのは確かなようだ。となると，足りないカネは稼ぐしかない。

『概覧』や学術誌『昆虫世界』には名和昆虫研究所主催の害虫駆除講習や講話の記事が多くみられる。では，研究所はこういった技術指導による謝礼を運営に充てていたのか？例えば，昭和3年8月5日から同月12日に開催された第41回全国害虫駆除講習会では，授業料として受講者から2円を徴収していた（『昆虫世界』第32巻370号）。①と同様のやり方で同年の東京朝日新聞1部の価格から換算すると（当時の1円＝現在の2,400円），昭和3年の研究所主催受講料は現在の感覚で5千円程度。講習が一週間以上の長丁場だったことを考慮すると，受講料はせいぜい資料代プラス α にすぎない。

大正4年発行の『概覧』によれば，名和昆虫研究所の講演や実習の受講者は国内や植民地を合わせ2万余名だと言う。この数字は明治29年の研究所設立以降約20年間の延べ人数と思われるので，受講者数を1年1,000名と見積もり，上述の受講料5千円が研究所設立以降据え置かれていたと仮定する。となると，数字を単純に掛ければ研究所が講習から得られる収入は年間500万円と一見かなりの額となる。ただ，この計算は延べ2万人の受講者の全員があくまで有償の講習を受けたことが大前提である。例えば，名和昆虫研究所は明治37年から同40年まで来所する修学旅行生に対して百数十回の特別講話会を開設していた（『昆虫世界』第11巻113号）。これら無償と思しき講話会聴講生も2万余名に含まれている可能性を考えると，実際の収入は年間500万円を少なからず下回ると考えた方が無難である（注4）。

いずれにせよ，受講料収入は名和昆虫研究所の収入源の一つではあっただろうが，研究所の屋台骨となり得た規模ではなさそうである。

③名和昆虫工芸部製作の蝶蛾鱗粉転写標本

それならばと名和靖は名和昆虫工芸部を立ち上げた。『貝殻蟲圖説』（明治34年）や『名和昆虫圖説』（明治37年）といった研究所発行の学術書籍とは全く別に，

昆虫を原料や題材とした趣味的な工芸品を制作販売しようとしたのである。

例えば，名和靖は明治36年に「昆虫廻轉器」なる物品を売り出した（『昆虫世界』第7巻67号広告。発売元は「岐阜市京町 名和昆虫研究所」とあり，名和昆虫工芸部ではない。同工芸部は研究所が明治37年に岐阜公園へ移転した以降に設けられた部署か？）。「昆虫の翅色と光線の関係を示さんがため」考案されたと言う。広告の図を見る限り，八角形の箱の天板に8個体の蝶標本が取り付けられており，手回しで天板を回転させる仕組みとなっているようだ。宣伝文句によれば，昆虫廻轉器は「雌雄淘汰の原理と天地自然の妙用を知るのに便利」とのことだが，広告の図と文章だけではどうにも商品のイメージを掴みにくい。10数個の超限定生産で価格は6円也。①で使った換算法に従えば，現在の貨幣価値で5万円弱のそこそこ高価な代物である。単なる実用科学的な教材でないことは確かだ。

名和昆虫工芸部の最大の発明品が「蝶蛾鱗粉転写標本」である。蝶蛾鱗粉転写標本とは蝶や蛾の羽の鱗粉を紙に移し，触角や厚みのある胴体等は実物を用いず絵画として描き，最終的には1頭の昆虫がいるかのように合成させたものだ。つまり半自然・半人工の標本だが，実際の昆虫を平面状にすることで冊子の頁に載せられるとの利点があった。蝶や蛾の鱗粉を紙に写し取る手法自体は18世紀のフランスで既に開発されていたようだが，名和靖は3年間改良を重ね，紙以外の木材や陶磁器などにも転写することに成功した（『昆虫世界』第12巻135号）。蝶蛾鱗粉転写標本は学術標本としての価値もあるが，開発者の名和は己の開発した手法が美術工芸に資することを念頭に置いていた。蝶蛾鱗粉転写標本は言わば芸術品なので，モノによっては大変値が張った。例えば，100種分の標本を収めた蝶蛾鱗粉転写標本は1冊25円もの価格が付けられたものもあった（石田，2009）。現在の貨幣価値で20万円になろうかと言う高価な代物である。

高額な昆虫美術工芸品に加え，比較的安価な昆虫商品も売り出した。「蓮草紙應用轉寫葉書」はそのうちのひとつである。これは台湾産の蓮草紙に草花を描き，蝶や蛾の鱗粉を転写させ，蝶や蛾たちが花に集まっているかの如き見える絵葉書である。大正7年の時点では3枚一組30銭で売り出していた（『昆虫世界』第22巻244号広告）。現在の貨幣感覚で大凡2千円弱ぐらいか。3枚の絵ハガキの価格としては高い気もするが，実物の蝶や蛾の鱗粉を手間暇かけて紙に貼っている以上，意外と安いように思える。また，広告中の「送料 貳組まで金貳銭」との表記から，名和昆虫工芸部は今で言う通信販売も行っていたことがわかる。

さて，名和靖の蝶蛾鱗粉転写標本は世間から高い評

価を得た。明治 42 年、名古屋市で開催された第二回日本製産品共進會では名和出品の蝶蛾鱗粉転写標本は金賞を受賞した(『昆蟲世界』第 13 卷 148 号)。また、名和靖の技術は美術工芸家からも注目された。例えば、明治 41 年 4 月以降滞京していた名和に対し、彫刻師や書師、玩具師などが名刺を持参して名和に面会を求め種々相談に訪れたと言う(『昆蟲世界』第 12 卷 132 号)。

もっとも、故意に名和の蝶蛾鱗粉転写標本を真似たかどうかは別にして、台湾に本拠を置く朝倉喜代松も大正以降同じような商売を思いついた。明治末年頃に台湾で標本商を起業したと推定される朝倉喜代松は年間数十万頭から 100 万頭近い台湾産蝶を工芸品原料として内地に送っていた(江崎, 1984; 保科, 2015a)。そして、江崎(1984)の「(朝倉喜代松によって捕獲された蝶は)翅と触角とは体軀から截りとられて、別に体の絵を印刷した紙に張り付けられる」との回想から、これらの商品も鱗粉転写標本と同類のものと考えてよい。名和昆蟲工芸部が何十万頭もの台湾の蝶を朝倉から独占的に仕入れていたとは到底考えられない。多くの蝶は他の昆虫工芸品製作業者に回っていたはずだ。世間から高評価を得た商品に対して類似品がすぐに出回るのは大正も平成も同じようである。

名和昆蟲工芸部を立ち上げたことによって研究所の運営がどの程度好転したかはわからない。名和靖は昆虫工芸にも深い造詣があったので、単なる金儲け目的だけで蝶蛾鱗粉転写法を開発したわけではあるまい。ただ、あの手この手で研究所の運営を安定させようと必死に努力していたことは窺えよう。

④国の予算獲得を目指して ～帝国議会における攻防。第一ラウンド～

県からの補助金が十分でないなら国に頼るしかない。名和靖がこう考えるようになったのは自然の流れである。時は第 14 回帝国議会(明治 32 年 11 月 22 日開会)。明治 33 年 2 月 2 日、衆議院で稲垣示代議士提出の「名和昆蟲研究所國庫補助ニ關スル建議案」が議題に上がった。提出された建議案は「政府は害虫駆除予防法を發布したが、肝心の効果の経過変遷を確認する機関がない。それを肩代わりしているのが岐阜の名和昆蟲研究所である。同研究所は無数の標本を収集し各地で講習会を開催しているが、(名和靖の)個人私産による公共的事業の展開には限界がある。そこで國庫補助として年千円を向こう 5 年間支給するよう、担当大臣に予算化させるべきである」と言うものだ(注 5)。稲垣提出の建議案に対し、翌日の 3 日、稲垣含む 9 名の議員が建議案審議の特別委員会委員に指名された。筆者はこの特別委員会の議事録を見いだせていないが、同月 9 日の稲垣示による本会議での特別委員会報告によれば、委員会では山

内吉郎兵衛が政府へ要求する予算は年千円から 3 千円に増額すべきとの提案をし、特別委員会はこの数字を可決した。これは、名和昆蟲研究所は運営に年間 4, 5 千円費やしているから、千円ではとても足りないとの判断理由からである。稲垣の委員会報告に対し議場からは特に反対意見は出てこず、建議案は無事可決された。

一方、この第 14 回帝国議会では貴族院でも「名和昆蟲研究所國庫補助ニ關スル建議案」が早川周造ら 49 名の発議者らによって同年 2 月 16 日提出された。貴族院での建議案の審議の場で名和靖のために熱弁をふるったのが、勅選貴族院議員の田中芳男である。詳細は保科(2016a)を参照していただきたいが、本稿では田中が議場で「本来なら国の農事試験場が害虫駆除研究に取り組みねばならないのに、残念ながら現状はそうではない。言わば国の事業を民間の名和昆蟲研究所に任せているのだから、同研究所に 3 千円規模の國家補助を行うのは当然である」と指摘した、とだけ述べておこう。貴族院では田中の主張に慎重意見を唱える議員もいたが、特別委員会に付託されることなく賛成者起立多数で可決されている。

⑤国の予算獲得を目指して ～帝国議会における攻防。第二ラウンド～

第 14 回帝国議会でも名和昆蟲研究所への國家補助建議案は両院で可決されたものの、国による予算措置は実現しなかった(理由は本章⑧参照)。そこで次の第 15 回帝国議会(明治 33 年 12 月 25 日開会)で仕切り直しとなる。前議会で建議した稲垣示に石井鼎、早川龍介、堀尾茂助、恒松隆慶の 4 代議士を加えた計 5 名が、同 34 年 3 月 18 日「名和昆蟲研究所ニ交付スヘキ國庫補助金追加豫算ノ提出ニ關スル建議案」を衆議院に提出した。そして同日中に石井鼎含む 9 名が特別委員会委員に指名され、同月 19 日に開かれた特別委員会には 5 名が出席した。委員会の冒頭で建議案提出者の一人の石井鼎が「本案は既に第 14 回議会で通過しているので今更審議の必要なし」と採決を促し、全員賛成で可決された。委員会の開会から閉会までの間、僅か 5 分である。

しかし事態は予想だにできなかった方向へ暗転する。同月 23 日の衆議院本会議で、特別委員会委員長の大村和吉郎は「名和昆蟲研究所國家補助の建議案は第 14 回議会で通過済みだ。委員会でも全員が賛成した」と簡潔に報告した。稲垣や石井ら建議案提出者 5 名は安心しきっていたであろう。しかし、片岡健吉・衆議院議長が賛否の採決のため、本案に同意の議員に起立を促したところ、なんと起立者少数で否決となってしまった。

帝国議会は、現在の国会のアメリカ式常任委員会中心主義とは異なり、本会議における審議を重視するイギリス流を採用していた(村瀬, 2015)。よって、特別委

員会の結論が本会議でひっくり返されても不思議ではない。

それにしても、本会議での議事録を見ても「賛成！」「反対！」との声が議場に入り乱れたことは読み取れるが、誰も具体的な反対意見を陳述していない。にも拘わらず、前議会では無風で通過した建議案がなぜ第 15 回議会で否決されてしまったのかは全くの謎だ。稲垣ら建議案提出者はあまりの予想外の結果に呆然となったのではなかろうか。なお、この本会議における否決の下の議事録の一部が『昆虫世界』第 5 巻 44 号に転載されている。名和靖も否決との結末は相当に悔しかったものと思われる。

ちなみに、第 15 回議会では田中芳男は貴族院に名和昆虫研究所国庫補助の建議案を提出すると言った同調の動きを見せていない。運悪く田中は同年 2 月 22 日に病気による 3 週間の請暇（≡病欠願）を議長宛に転出していた。田中は体調不良で衆議院の稲垣示らと連携を取れなかったのであろうか。

⑥国の予算獲得を目指して ～帝国議会における攻防。第三ラウンド～

名和の支援者たちはなおも屈しなかった。次の第 16 回帝国議会（明治 34 年 12 月 10 日開会）で、同 35 年 2 月 18 日、天野若圓外 6 名の代議士による「名和昆虫研究所ニ交付スヘキ国庫補助金追加豫算ノ提出ニ關スル建議案」が衆議院に建議された。政府は明治 35 年度追加予算に同研究所への補助費を組み込み、との要求である。同建議案は特別委員会に付託されることとなり、天野若圓ら 9 名が委員会委員に指名された。

残念ながら筆者はこの特別委員会の議事録を見つけていない。よって委員会審議の具体的な過程は不明だが、委員会では建議案を大幅に修正のうえ、満場一致で可決、同年 2 月 22 日に本会議で委員長報告が行われることとなった。天野若圓委員長は従来の理屈を繰り返した。ようするに「名和昆虫研究所は害虫駆除事業に対し大きな功績がある。国として十分支援すべきだ」と言うものである。同研究所の理解者の一人である恒松隆慶代議士も「異議なし。どうか直ちに決せられんことを！！」と応援のヤジを飛ばした。

しかし、花井卓蔵代議士は天野の委員長報告に対し不信感を表明した。それは「衆議院に提出された元々の建議案は政府に対し追加予算を出せ、という期間を定めない単純な物であった。しかし、この修正建議案は委員会審議により『今後政府は名和昆虫研究所に対し 5 年間国庫補助を継続せよ』と大きく修正されている。その変貌ぶりはあまりに不思議だ」と言う指摘であった。もつともである。天野は委員会審議の経緯を議場で全く説明していなかったからだ。天野は慌てて「建議案を最初に

提出した時は議会の会期の残りが少なくなっており、とにかく政府は名和昆虫研究所に予算を出してほしいと言うものだった。委員会で建議案の内容が大きく修正されたことに他意はない」と弁明した。このように多少異論めいた意見が出される場面があったが、修正建議案は賛成起立者多数で無事可決されている。

⑦国の予算獲得を目指して ～帝国議会における攻防。第四ラウンド～

第 14 ～ 16 回帝国議会における代議士たちの可決否決の繰り返しに痺れを切らしたか、名和靖は帝国議会に対し直接行動に出た。請願である。請願とは大日本帝国憲法で国民に保障された権利の一つだ。請願書は紹介議員を通じて提出され、請願委員長が規定に合するかどうかを確認した後、議長名で受理する。受理された請願は、委員長名で請願文書表を作成し、議長から全議員に配布される。そして、請願委員会で審査された後、採択すべきか否かを議決する。採択されれば本会議で特別報告がなされ、ここでも採択が議決されれば、意見書を付けて政府に送付される、との手続きを踏んだ（小林, 2002）。乱暴にまとめるなら、請願とは帝国議会に議席を持たない一般国民でも実行できる議会への直訴制度と言うことになろうか。

第 26 回帝国議会（明治 42 年 12 月 25 日開会）で、名和靖は衆議院・貴族院の両院に「国庫補助ノ件」の請願を提出した。趣旨は説明するまでもなく、国の発展に必須な害虫防除対策研究を行っている我が研究所に是が非でも国の財政的支援をお願いしたい、と言うものである。

名和の請願を受けた帝国議会側の対応は如何なるものであったか。貴族院側の審議の詳細な過程は不明だが、明治 43 年 2 月 7 日開会の第 2 回請願委員会（雑科分科会）で名和の請願は「議院ノ會議ニ付スヘシト議決シタル請願書」5 件に含まれた。要するに請願委員会でも可決されて本会議に送られたのである。そして、同年 3 月 9 日、本会議でも特に反対意見は出なかったため、名和の請願は徳川家達貴族院議長名の意見書付きで桂太郎内閣総理大臣に送付された。端的に言うなら、名和の請願は貴族院を無事通過したのである。

一方の衆議院。同年 2 月 2 日開会の第一回請願委員会第三分科会で名和の請願が取り上げられた。請願の紹介者は古井由之代議士。古井は請願委員会委員ではなかったが、主査の許可を得てこの日の委員会に出席し、名和の請願の趣旨を陳述した。古井は「昨年、北陸中国地方でウンカが大発生し、7,500 万円もの農業被害が出た。害虫被害は深刻である。名和昆虫研究所に国庫補助を与え、今以上に害虫対策にあたらせるべきだ」と主張した。しかし、委員会に政府委員として出席している下

岡忠治（農商務省農務局長）は、「政府として名和昆虫研究所の功績が多であることは認めている」としつつも、「農商務省として名和昆虫研究所に特別費を予算に計上すれば、他の私立学校や私立研究所からも同様の要求が乱発しかねない。名和昆虫研究所は昆虫学の普及に力を入れており、その他実施している事業等を考慮すると、文部省から補助するのが適当だと思う」と答弁した。

請願委員会委員の大熊三之助は下岡の答弁に納得せず、「名和昆虫研究所の事業は非常に特殊である。農商務省が同研究所に予算を計上したとしても、他の私立学校にまで助成範囲が広がる弊害が生まれることはないはずだ」と主張した。すると下岡は「現在財政窮迫しており、名和昆虫研究所に対する特殊補助は避けたい。しかし、同研究所の業績は政府としても十分評価しているので、適当な支援方法を模索中である」と農商務省が名和昆虫研究所に直ちに予算を支出することにあくまで難色を示した。

この日の請願委員会第三分科会に出席している政府委員は下岡忠治と上山満之進（山林局長）の農商務省の官僚二人であり、文部省からは出ていない。よって、下岡の答弁に文部省側がどう反応するかは微妙だが、要するに下岡は農商務省の官僚として文部省へ予算支出を押し付けたいわけだ。

私事で恐縮ながら、越前の地で様々な絶滅危惧種の保全の委員会に出席している筆者の前で繰り返される省庁、県、市町村等の行政側の言い分はまさにこれである。「必要な事業であることは重々承知しているけれども予算がない」「うちではなく他所が予算を出すべきだ」などなど。役人の答弁と言うものは100年前も今も何も変わっていないことに改めて嘆息した。

結局、請願委員会第三分科会では「カネの出所は農商務省か文部省か」の白黒を付けないまま、政府に対し国庫補助を求めるとの形で可決した。同年2月25日の本会議では、請願委員会委員長の報告に対し異議は出ず、名和の請願は採択された。貴族院・衆議院両院とも名和の請願は無事認められたわけである。

⑧名和昆虫研究所に対する国庫補助ついに実現す

名和昆虫研究所に対する国庫補助を求める建議案が最初に採択された第14回帝国議会は明治32年12月開会である。つまり、名和靖は明治29年に研究所を立ち上げてから程なくして、国による財政支援を得るための帝国議会対策を念頭に置いていたことになる。

こうなると人が考えることは明治も平成も同じである。地元選出の代議士に頼ろうと言うわけだ（注、貴族院には衆議院型の都道府県選挙区はない）。本章④～⑦で登場した国会議員のうち、天野若圃、石井鼎、古井由之らは岐阜県選出の衆議院議員で、早川周造貴族院議員

はやはり岐阜県出身の多額納税者議員である。ただし、名和靖は地元選出の議員らに幾度となく研究所支援を陳情したであろうが、名和自身が政界に対し関心や野心があったとは考えにくい。上記議員の所属政党・会派は天野が中正倶楽部、石井と古井は立憲政友会だ。そして第15回帝国議会衆議院での「名和昆虫研究所ニ交付スヘキ国庫補助金追加豫算ノ提出ニ關スル建議案」提出者で、愛知県選出の早川龍介と堀尾茂助の二人はそれぞれ憲政会及び正交倶楽部所属の代議士である。つまり、名和靖が特定の政治勢力と結びついた形跡はなく、名和昆虫研究所に対する議員らの支援活動はいつも超党派的だ。なお、岐阜県議会を通した国への援助申請もなされている。明治43年12月、岐阜県議会は名和昆虫研究所への国庫補助を求める意見書を内務大臣に提出した（『概覧』）。こちらも県議会への名和の何らかの働きかけがあったとみなすのが自然である。

ただ、④～⑦で上述したように、名和昆虫研究所に対する国庫補助の建議や請願が何度となく可決されたからと言って、直ちに研究所の口座へ国からカネが振り込まれるわけではない。建議とは議員からの意見を政府に伝達し、請願は臣民からの意見を議会が介して政府に送るもので、法令の改正や制定に止まらない多種多様な問題を取り扱うことが可能であった。しかし、議会で尊重されたのは建議や請願の内容の実効性ではなく趣旨である（葦名, 2010）。ようするに、建議や請願の採択は政府に対し厳密な法的拘束力を持つものではない。建議とは言うなれば議会の意思表示に過ぎないからだ。名和靖の苦悩はそこにあった。

しかし、結果として名和靖の国に対する粘り強い働きかけは実った。明治44年に名和昆虫研究所が財団法人となったのち、とうとう国庫補助を受けるところまで漕ぎつけた。明治44年以降は、国庫より年間1,500円、岐阜県より2,000円、岐阜市より300円の公金が補助されることとなった（『概覧』）。名和は研究所の年間支出の平均4,500円（本章①参照）とほぼ同額の公的助成金の確保に成功したのである。

⑨『財団法人名和昆虫研究所概覧』編纂の背景

研究所の財団法人化や国からの予算獲得は別の効果も生んだ。研究所に対する社会的信用が増したか、明治44年から大正3年までに千円近い新たな寄付金を集められたのである（『概覧』）。

研究所経営は財政面で一息つけたはずだが、国からの予算獲得成功に胡坐をかき名和靖ではない。第一、財政難の状態は相も変わらず慢性化している。そこで名和は次の一手を打つ。大正4年10月、名和は基本金を募ることを決意した。『概覧』に挿入された「財団法人名和昆虫研究所基本金募集趣意書」によると、昨今害虫に

よる農作物被害は1億5千万円に上る。現所長の名和靖は昆虫学ならびに害虫駆除予防事業を講究するため明治29年に独力で研究所を設立、以後20年間害虫駆除に心血を注いだ。然るに現在研究所は常に資力窮乏の状態にある。そこで東洋唯一の昆虫研究所の維持発展のための安定した基本金10万円を募集する、とある。

大正4年の東京朝日新聞1部が2銭だ。本章①の計算方法を適用すると当時の1円=現在の6,000円となるので、名和靖は6億円もの基本金を募ったことになる。これが多いか少ないかは人によって判断は分かれるだろうが、研究所予算約20年分の額に匹敵するカネを集めようと言うわけだから、やはり野心的と評することができるかと思う。

募集するのは基本金なので、集めたカネをすぐに使うわけではない。基本金募集規定には、財団法人が基本金を銀行預金ないしは有価証券として保持し、その利子を研究所の費用に充てるとある。なお、大正4年12月発刊の『昆虫世界』(第19巻220号)にも「基本金募集につき広く援助を仰ぐ」との広告記事が載った。ここでは、研究所の事業が国家に必要不可欠なものであり、それ故に援助頼むと切実に訴えている。

筆者は『概覧』掲載の趣意書原文「政論の方針に依て省長すべき補助金を以て此悠久不変の事業を確立せんと欲するは萬全を期するの道に非ざるを以て」の箇所に関心を惹かれた。行間を読みつつ思い切った意識をみると、政権交代の影響を受けやすい国庫補助にあまりに頼るのは危険、ようするに政府なんぞあてにならん、だから基本金を募るのだと名和は吐露しているようだ。名和靖にこう言わせたのは、大正政変、シーメンス事件と内閣が2代続けて激しい政治闘争によって倒閣された当時の騒がしい世情もあろうし、本章⑧で述べたように、名和昆虫研究所は国庫補助を受ける迄に帝国議会や政府に翻弄され続けた苦い経験があるからだろう。名和のこの危惧はやがて現実のものとなる。

こうして見ると、大正4年に『概覧』が編纂された理由がわかる。『概覧』にたまたま「財団法人名和昆虫研究所基本金募集趣意書」が挿入されているのではない。基本金募集のため研究所のこれまでの経緯や実績を訴え、趣意書を挟むことを第一の目的として『概覧』が作成されたのである。

V. 名和昆虫研究所支援者としての田中芳男.

～“虫屋”田中芳男の再評価～

改めて「財団法人名和昆虫研究所基本金募集趣意書」を見てみよう。基本金募集の発起者には17名が名を連ねた。17人のうち鳥田剛太郎岐阜県知事と松岡勝太郎岐阜県会議長の2名を除けば、全員が現職ないしは元職の衆議院議員並びに貴族院議員だ。一方、賛成者は計

11名で貴族院議長の徳川家達公爵のような政界の重鎮のほか、現役官僚である農商務省農務局長の道家齋も含まれている。

賛成者11名の中から何人かの気になる人物をピックアップしたい。一人目は日本銀行総裁三島彌太郎子爵。三島彌太郎は福島事件で悪名を馳せた三島通庸の子。貴族院議員としては最大派研究会の有力議員であり、政界への影響力との点では有名な父を凌ぐものがあった。しかし、三島彌太郎が賛成者に名を連ねたのは単に有力政治家だったから、と言うよりは昆虫業界から「三島子なども皆蟲好きでは錚々たるもの」(『昆虫世界』第6巻56号)と揶揄されたほど、彼自身が昆虫学に深い関心があったからである。三島彌太郎は駒場の農学校で学び、のち米国留学中に害虫学を修めたので(坂本, 1930)、言わば“虫屋政治家”の一人である。実際、第21回帝国議会の「蠶病豫防法特別委員会」で、三島は委員会委員でないにも関わらず会議に出席し、養蚕について意見を多々まくしたてたことがある(保科, 2016a)。

次は貴族院議員でかつ帝國農會長の肩書も持っていた松平康莊侯爵。康莊は旧越前藩松平家の当主で、旧福井城跡に松平試農場を設立した。康莊は当時の新聞上で「華族中最も園藝に熱心なるものを求めば侯爵松平康莊君の右に出づるものなからむ」(明治36年6月7日付大阪毎日新聞)と評されるぐらい園芸並びに農学に精通していた。それ故に害虫駆除に対する熱意も強かったはずで、名和昆虫研究所の基本金事業には躊躇なく賛成者に名を連ねたことであろう。松平康莊は名和靖の葬儀の際は弔文も送っている(『昆虫世界』第30巻349号)。なお、全くの余談ながら、最後のニホンオオカミは明治38年に奈良県で捕獲された個体ではなく、明治43年に松平試農場で捕殺された個体だとの説が近年出されて(吉行・今泉, 2003)、同農場の名前は意外な方面で話題になることがある。

最後は田中芳男。「財団法人名和昆虫研究所基本金募集趣意書」に賛成者として名を連ねた田中は、幕末時にはパリ万国博覧会出展用標本を確保するために虫捕御用を幕府より命ぜられた(奥本, 1985)。田中は日本人として初めて本格的昆虫採集を業務として行った幕臣である。維新後は明治政府に登用され、官僚として博物館や動物園建設に尽力した。その他、大日本農會、大日本山林會、大日本水産會などの役員を長く務めた。近代農林水産業に対する田中の貢献度は頗る高いと言わねばならぬ。

しかし、虫屋としての田中の業績は幕末の虫捕御用ばかりが取り上げられる一方で、明治期については言及されることがない。それゆえ、維新後田中は昆虫業界と一切関わりを持たなかったのかと誤解されがちだが、決してそのようなことはない。例えば、田中は明治23年

に貴族院議員に勅選されて以降帝国議会で害虫関連法案の審議の場で積極的に発言していた(保科, 2016a).

名和靖が初めて田中芳男の知遇を得たのは明治 16 年であると言う。そして、同 19 年から名和が東京帝国大学理科大学で動物学を研修中にも田中の自宅を訪問し指導を受けていた(木村, 1944)(注 6)。大正 4 年に田中が男爵の爵位を授爵し華族に列せられたことへの祝辞、及び田中逝去の追悼記事に雑誌『昆虫世界』がかなりの紙面を割いていることから(『昆虫世界』第 20 巻 221 号及び 227 号)、名和と田中の親密さが窺える。2 人の交流については名和靖側の伝記では紹介されているものの(木村, 1944)、逆に田中芳男側の略歴概説や伝記で殆ど言及されてこなかったため(例えば長谷川, 1967; みやじま, 1983; 小西, 1989)、あまり着目されることはなかった。しかし、結論として田中芳男は名和靖並びに名和昆虫研究所最大の支援者の一人であったと言ってよい。これは明治維新以後も田中が昆虫業界との深いかかわりを持っていたことを意味し、“虫屋”田中芳男の再評価にも繋がる事績である。

田中芳男が名和靖を支援した事項の一つ目は、明治 39 年 12 月、名和昆虫研究所維持会の設立である。名和昆虫研究所維持会とは当時既に経営難の状態にあった名和昆虫研究所の後援会のような組織で、田中は総裁職を引き受けている。維持会規定によると、会は会員から現金はもちろん物品の寄贈も受け付け、研究所の永続維持を支援することを目的とした(『昆虫世界』第 11 巻 113 号)。総裁の田中自身も少なからず私財を投じたはずである。田中の尽力もあってか、維持会は明治 40 年から同 41 年にかけて全国有志者から 2,500 円余の寄付を集めることができた(『概覧』)。なお、田中(2000; 2004)などの従来の田中芳男の年譜では、田中が名和昆虫研究所維持会総裁に就任した事実は全く言及されていない。かく言う筆者作成の田中芳男の年譜でも、彼が維持会の総裁職にあったことを完全に見落としていた(保科, 2016b)。

二つ目は、田中が名和昆虫研究所と皇族を結ぶ懸け橋となっていたこと。名和靖が開発した蝶蛾鱗粉転写標本(前章③参照)はその高い芸術性故に、皇族への格好の献上品となった。『昆虫世界』の記事から、梨本宮、閑院宮、東久邇宮、久邇宮、山階宮等の皇族が名和昆虫研究所を訪問し、その際に研究所側が蝶蛾鱗粉転写標本やその他昆虫工芸品を献納していることがわかる。返礼として宮家から金一封を下賜される直接的な資金獲得の事例もあったが(『昆虫世界』第 25 巻 284 号及び第 28 巻 325 号など)、間接的には皇族への昆虫工芸品献納は名和昆虫工芸部の宣伝効果を少なからず生んだに違いない。

明治 41 年 5 月、名和昆虫研究所は田中芳男に手続き

を依頼することにより、竹田宮へ鱗粉転写製品を献上してきた(『昆虫世界』第 12 巻 130 号)。そして、同年 7 月には、同じく田中芳男の尽力で鱗粉転写製品 4 点の天皇皇后両陛下及び皇太子・皇太子妃両殿下への献納が実現する(『昆虫世界』第 12 巻 132 号)。同月 10 日に宮内大臣から田中芳男に無事製品が捧呈された旨の通牒があった(明治 41 年 7 月 14 日付東京朝日新聞)。この事は直ちに田中から名和へ伝えられたであろう。名和靖一世一代の栄誉である。

名和昆虫研究所と天皇家との関係は他にもあった。雑誌『昆虫世界』は天皇家へ献本されていた。明治天皇の三皇孫殿下の一人は(おそらく後の昭和天皇)『昆虫世界』の送付を心待ちにしており、発行日が近づくと「『昆虫世界』はまだ届かぬのか」と侍従にお尋ねになられることもあったと言う(『昆虫世界』第 15 巻 167 号)。口上によるお褒めに過ぎないとは言え、皇孫殿下の『昆虫世界』への期待を知った名和靖の感奮ぶりは現代人の想像を大きく超えるものであったに違いない。

この他、田中芳男は明治 34 年 4 月開催で名和昆虫研究所主催の第一回全国昆虫展覧会(岐阜市)の名誉会長職を引き受けている(『昆虫世界』第 4 巻 40 号)。更に、明治 36 年の第五回内国勸業博覧会での名和靖の生体水生昆虫の出展は(第 II 章参照)、博覧会審査第一部長でもあった田中芳男の斡旋や推薦で実現した可能性もあろう。田中は同博覧会での水族館展示の成功に大いに期するものがあつたらしく、自身で蓑亀を出品しているほどだ(明治 36 年 6 月 23 日付東京朝日新聞)。この他、明治 23 年に貴族院議員となって以降死去までその地位にあった田中芳男は、帝国議会の場で直接名和昆虫研究所への国家補助を訴えたことがあるが、それは前章の④で既に述べた。

田中芳男は度々名和昆虫研究所を訪問した。例えば、明治 40 年 6 月 16 日には研究所標本室落成式及び附属農学校開講式に出席している(明治 40 年 6 月 17 日付東京朝日新聞)。それ故に田中は研究所の経営状況をよく知り得る立場にあった。田中は貴族院議員との立場を最大限に生かして、名和昆虫研究所の支援に努めたのである。

VI. 貧に屈することない名和昆虫翁

明治 44 年、苦心惨憺漸く国からの助成を実現させた名和昆虫研究所であるが、事態は大正の終わりに一気に急転する。大正 14 年 1 月、名和昆虫研究所は国庫補助打ち切りの通告を受けたとの記事を『昆虫世界』に掲載した(『昆虫世界』第 29 巻 330 号)。理由は政府の行財政整理による農商務省の財政難。予算縮小となれば生き物関連予算が真っ先に削られるのは今も昔も変わりはない。名和靖の「政局に左右されやすい国の予算に依存

するのは危険」との懸念は不幸にも的中したのだ。「當研究所としては可なり大なる痛手なりとす」と『昆蟲世界』は落胆を隠せなかったが、名和靖にはこの緊急事態に対処する時間は最早残されていなかった。名和は翌大正 15 年 8 月 30 日午後 1 時 10 分に逝去する（『昆蟲世界』第 30 卷 349 号）。

とは言え、仮に名和靖があと 10 年存命していたとしても、彼の活動意欲が経営難を理由に意気消沈したとは思えない。名和には国の支援なしに明治末までの 15 年間研究所を維持発展させてきた才覚と強固な意思があった。名和靖最晩年の著『昆虫翁白話』掲載の「貧乏が幸福」との小話がある。名和家は貧しく富家の友人と行動を共にできなかったが故に、名和靖は自然を愛し今日の昆虫翁になり得たのである。と。研究所経営に四苦八苦しても、名和の昆虫学に対する意欲は終生決して減じることはなかった。名和が世間から岐阜県二大篤学家の一人と称されたのも（明治 43 年 9 月 10 日付東京朝日新聞）、貧乏を少しも苦しめない彼の心意気あるが故であろう。

現在の名和昆虫博物館の website によれば「害虫駆除研究の公的な機関が充実してくるにつれ、（財団法人名和昆虫研究所は）その主な役割を一般昆虫の啓蒙普及へと移し、現在では付属施設である名和昆虫博物館を中心に活動をしています」とある。名和靖が設立した財団法人名和昆虫研究所は研究機関及び害虫駆除技術指導機関としての役割を終えたのだ。雑誌『昆蟲世界』も戦後間もなく廃刊となった。

しかし、名和靖の精神は美濃飛驒の地に深く根付いた。平成 27 年『岐阜県昆虫目録（改訂版）』の発刊は県や市の補助を全く受けることなく、岐阜県内の昆虫愛好家諸氏によって成し遂げられた一大業績だと言う。「例え行政の支援が得られなくても己の信念に従い昆虫学普及に邁進するだけ」。名和靖の遺志は今も岐阜県の昆虫愛好家たちに脈々と受け継がれている。

VII. 注釈

（注 1）『財団法人名和昆虫研究所概覧』は性質上あちこちに配布された冊子のはずである。したがって、それなりの部数が刷られたものと推察されるが、本文に書いた通り筆者が把握する現物は名古屋大学図書館が所蔵する 1 冊だけである。ただ、書籍でない『財団法人名和昆虫研究所概覧』は各種データベースに登録されていないだけで、現在も多くの研究機関が資料として保管している可能性もあるか。

（注 2）瀬戸口（2009）は現在の財団法人名和昆虫研究所が所蔵する「自明治四四年至昭和七年補助金一覧」「大正元年度財団法人名和昆虫研究所歳入決算説明」の

2 編の一次資料を引用している。研究所の財務関係資料の一部は現存しているらしい（筆者未見）。

（注 3）本稿では明治期の〇円は現在の貨幣価値で×円に相当するとの換算値を多用している。しかし、本文中で述べたように、その換算方法は相当乱暴なものである。人々の生活水準や経済規模が全く異なる明治・大正期と現在とでは貨幣価値の比較は容易ではない。その無理を十二分に承知の上で貨幣価値を強引に換算したのは、名和昆虫研究所の財政規模に対し、ある程度実感を持ちやすいようにするためである。筆者は本稿で用いた貨幣換算値の第三者による引用を希望するものではない。

（注 4）本文に書いたように、『概覧』が誇る「講演や実習の受講者は 2 万余名」との人数の内訳や範囲には疑問が残る。瀬戸口（2009）は専門的な害虫駆除指導講座、つまり厳密な意味での講習会受講者数は昭和 19 年までで延べ 2,300 人以上としている。

（注 5）帝国議会本会議における議事については『帝国議会衆議院議事速記録』『帝国議会貴族院議事速記録』（共に東京大学出版会）、帝国議会委員会の議事については『帝国議会衆議院委員會議録』（東京大学出版会）、『明治期帝国議会貴族院委員會議録』（臨川書店）の各該当巻を参照した。なお、本稿執筆に利用した巻号やそれぞれの出版年は省略する。

（注 6）平野（1943）によれば、名和靖は明治 16 年の夏休みを利用して上京した。一方、本文中に書いたように木村（1944）は名和が田中芳男の知遇を得たのは同じ明治 16 年とする。よって、二人は東京で知り合ったとすれば、両書の記述は辻褄が合う。しかし、木村（1944）は田中の出自について「もと美濃國久々利の藩士」と誤解を招きかねない書き方をしており、伝記の記述の信憑性にやや不安が残る。

田中芳男は信州飯田の医師田中隆三の三男として生まれた。田中が生まれ育った飯田城下中荒町の千村陣屋は美濃国久々利の旗本千村平右衛門の役所であったから（飯田市美術博物館編、1999）、田中は久々利の地と無関係だったわけではない。

旗本千村氏に仕官し、信州飯田の荒町役所詰の市岡家は歴代本草学をはじめとする学才に優れる者が多かった。そして、市岡家出身の北原因信は美濃岩村藩領上村から転居してきた田中隆三を千村家に紹介したとの縁がある。そして、田中隆三の息子の芳男は市岡家の近所で生まれ育ったために、市岡家の本草学や博物学より影響を受けることが大きかったと考えられている（可児市編、2010）。

以上, 木村 (1944) の「田中はもと美濃國久々利の藩士」との文言は全くのデタラメではないが, 多くの読者は田中を岐阜県出身と勘違いするだろう。さらに言えば, 著者の木村小舟自身が名和靖と田中芳男は同郷だから親しかったのだと勘違いしているとも疑えるか。

VIII. 引用文献

- 葦名ふみ, 2010. 帝国議会衆議院における建議と請願。一政府への意見伝達手段として一。レファレンス, 60 (11): 93-115.
- 土井久作, 1937. 昆虫学者小傳. 1. 名和靖氏. 昆虫研究, 1 (1): 20.
- 江崎悌三, 1984. 台湾紀行. p. 5-41. 江崎悌三著作集第三卷. 思索社. 401 pp.
- 長谷川仁, 1967. 明治以降物故昆虫学関係者経歴資料集。一日本の昆虫学を育てた人々一。昆虫, 35 (3): 1-98.
- 平野威馬雄, 1943. 名和昆虫翁. 学習社. 200 pp.
- 保科英人, 2015a. 蝶類学者仁禮景雄先生小傳. 日本海地域の自然と環境, (22): 111-131.
- 保科英人, 2015b. 博物学者高千穂宣麿先生小傳. 日本海地域の自然と環境, (22): 133-223.
- 保科英人, 2016a. 没後 100 年. 帝国議会における元虫捕御用の田中芳男. ビオストーリー, 25: 92-100.
- 保科英人, 2016b. 没後百年田中芳男先生年譜. 日本海地域の自然と環境, (23): 113-130.
- 飯田市美術博物館編, 1999. 日本の博物館の父田中芳男. 飯田市美術博物館. 92 pp.
- 石田暁子, 2009. 蝶蛾鱗粉転写標本. 100 年前の翅のきらめき. 国立国会図書館月報, (580): 2-3.
- 可児市編, 2010. 可児市史第二巻. 通史編. 古代・中世・近世. 可児市. 701 pp.
- 木村小舟, 1944. 昆虫翁名和靖. 童話春秋社. 276 pp.
- 小林和幸, 2002. 明治立憲政治と貴族院. 吉川弘文館. 374 pp.
- 小西正泰, 1989. 「博覧会男爵」田中芳男. 科学朝日, 49 (12): 90-94.
- 國雄行, 2005. 第五回内国勸業博覧会と大阪. 文化国際研究, 9: 33-49.
- みやじましげる, 1983. 田中芳男傳. 田中芳男・義廉顕彰会. 438 pp.
- 森永卓郎監修, 2008. 明治・大正・昭和・平成. 物価の文化史事典. 展望社. 477 pp.
- 村瀬信一, 2015. 帝国議会. <戦前民主主義>の五七年. 講談社選書メチエ. 286 pp.
- 名和靖, 1924. 昆虫翁白話. 名和昆虫工藝部. 200 pp.
- 日本科学史学会編, 1965. 日本科学技術史体系. 第 15 巻. 生物科学. 第一法規出版. 578 pp.
- 奥本大三郎, 1985. 虫捕御用のパリ万博. 一博物学者田中芳男小伝. 中央公論, (1199): 529-537.
- 坂本辰之助, 1930. 子爵三島彌太郎傳. 昭文堂. 451 pp.
- 瀬戸口明久, 2009. 害虫の誕生. 一虫からみた日本史. ちくま新書. 217 pp.
- 白水隆文庫刊行会編, 2007. 物故・日本の蝶研究者, 肖像写真と略歴. p. 311-330. 白水隆アルバム. 白水隆文庫刊行会. 368 pp.
- 高千穂宣麿, 1946. 鶯嶺仙話. 九州帝國大學附属彦山生物學研究所. 130 pp.
- 田中義信, 2000. 田中芳男十話. 田中芳男経歴段. 田中芳男を知る会. 147 pp.
- 田中義信, 2004. 新資料. 田中芳男自筆「田中芳男履歴年表」解説と翻刻. 飯田市美術博物館研究紀要, 14: 63-80.
- 吉行瑞子・今泉古典, 2003. 福井城内で射殺されたニホンオオカミ. Animate, (4): 69-72.
- 財團法人名和昆虫研究所編, 1915. 財團法人名和昆虫研究所概覧. 財團法人名和昆虫研究所. 20 pp.